

補強土(テールアルメ)壁工法設計・施工マニュアル 第4回改訂版 正誤表

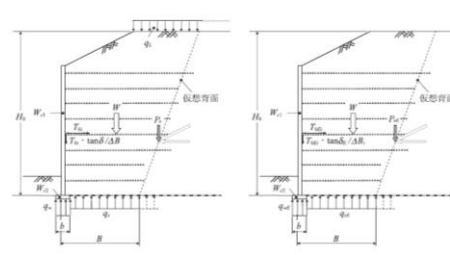
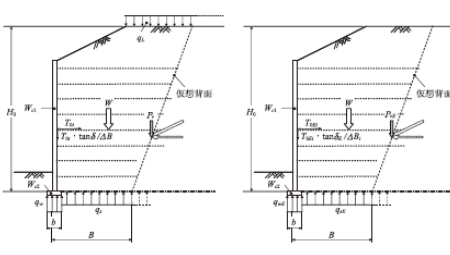
章	頁	行	誤	正																																			
-	-	4	第4回改訂版の発刊にあたって 我が国においては、	我が国においては、																																			
2	34	表-2.1	硬質ゴムプレート：硬度 60 (天然ゴム) 80 (再生ゴムチップ)	硬質ゴムプレート：硬度 60 (天然ゴム) 85(粉碎繊維入り天然ゴム)																																			
2	56	表-2.13	<p>表-2.13 コルクプレートの物性</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>項目</th> <th>規格値</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>密度 kg/m³</td> <td>300±30 ※</td> </tr> <tr> <td>圧縮荷重(50%圧縮時)N/cm²</td> <td>98.1以上</td> </tr> <tr> <td>復元率(50%圧縮荷重除荷後)%</td> <td>90以上</td> </tr> <tr> <td>はみ出し量(3方固定50%圧縮時)mm</td> <td>1.5以下</td> </tr> <tr> <td>沸騰水中煮沸(100℃, 3時間)</td> <td>崩壊しない</td> </tr> </tbody> </table> <p>※密度は規格値ではなく、製品参考値</p>	項目	規格値	密度 kg/m ³	300±30 ※	圧縮荷重(50%圧縮時)N/cm ²	98.1以上	復元率(50%圧縮荷重除荷後)%	90以上	はみ出し量(3方固定50%圧縮時)mm	1.5以下	沸騰水中煮沸(100℃, 3時間)	崩壊しない	<p>表-2.13 コルクプレートの物性</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th rowspan="2">項目</th> <th colspan="2">規格値</th> </tr> <tr> <th>高密度タイプ</th> <th>旧来タイプ</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>適用テールアルメ</td> <td>タイプ I, II</td> <td>タイプ I ※2</td> </tr> <tr> <td>密度 kg/m³</td> <td>560±40 ※1</td> <td>300±30 ※1</td> </tr> <tr> <td>圧縮荷重(50%圧縮時)N/cm²</td> <td>800以上</td> <td>98.1以上</td> </tr> <tr> <td>復元率(50%圧縮荷重除荷後)%</td> <td colspan="2">90以上</td> </tr> <tr> <td>はみ出し量(3方固定50%圧縮時)mm</td> <td>6.0以下</td> <td>1.5以下</td> </tr> <tr> <td>沸騰水中煮沸(100℃, 3時間)</td> <td colspan="2">崩壊しない</td> </tr> </tbody> </table> <p>※1 密度は規格値ではなく、製品参考値 ※2 宅地造成等規制法施行令第14条の規定に基づく国土交通大臣認定擁壁のみ</p>	項目	規格値		高密度タイプ	旧来タイプ	適用テールアルメ	タイプ I, II	タイプ I ※2	密度 kg/m ³	560±40 ※1	300±30 ※1	圧縮荷重(50%圧縮時)N/cm ²	800以上	98.1以上	復元率(50%圧縮荷重除荷後)%	90以上		はみ出し量(3方固定50%圧縮時)mm	6.0以下	1.5以下	沸騰水中煮沸(100℃, 3時間)	崩壊しない	
項目	規格値																																						
密度 kg/m ³	300±30 ※																																						
圧縮荷重(50%圧縮時)N/cm ²	98.1以上																																						
復元率(50%圧縮荷重除荷後)%	90以上																																						
はみ出し量(3方固定50%圧縮時)mm	1.5以下																																						
沸騰水中煮沸(100℃, 3時間)	崩壊しない																																						
項目	規格値																																						
	高密度タイプ	旧来タイプ																																					
適用テールアルメ	タイプ I, II	タイプ I ※2																																					
密度 kg/m ³	560±40 ※1	300±30 ※1																																					
圧縮荷重(50%圧縮時)N/cm ²	800以上	98.1以上																																					
復元率(50%圧縮荷重除荷後)%	90以上																																						
はみ出し量(3方固定50%圧縮時)mm	6.0以下	1.5以下																																					
沸騰水中煮沸(100℃, 3時間)	崩壊しない																																						
2	56	表-2.14	<p>表-2.14 硬質ゴムプレート</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>項目</th> <th>規格値</th> <th>規格値</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>材質</td> <td>天然ゴム</td> <td>再生ゴムチップ</td> </tr> <tr> <td>硬度(Hs)度</td> <td>60</td> <td>80</td> </tr> </tbody> </table>	項目	規格値	規格値	材質	天然ゴム	再生ゴムチップ	硬度(Hs)度	60	80	<p>表-2.14 硬質ゴムプレート</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>項目</th> <th>規格値</th> <th>規格値</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>材質</td> <td>天然ゴム</td> <td>粉碎繊維入り天然ゴム</td> </tr> <tr> <td>硬度(Hs)度</td> <td>60</td> <td>85</td> </tr> </tbody> </table>	項目	規格値	規格値	材質	天然ゴム	粉碎繊維入り天然ゴム	硬度(Hs)度	60	85																	
項目	規格値	規格値																																					
材質	天然ゴム	再生ゴムチップ																																					
硬度(Hs)度	60	80																																					
項目	規格値	規格値																																					
材質	天然ゴム	粉碎繊維入り天然ゴム																																					
硬度(Hs)度	60	85																																					
3	65	表-3.1	③橋台に適用する場合は、上部工の設計条件及び反力	③テールアルメに工作物等を上載する場合は、上載する工作物等の設計条件及び反力																																			
4	99	表-4.4	<p>表-4.4 設計水平震度の標準値 k_h (部材の安全性及びテールアルメ自体の安定照査時)^{※1}</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th rowspan="2"></th> <th colspan="3">地震種別</th> </tr> <tr> <th>I種</th> <th>II種</th> <th>III種</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>レベル1地震動</td> <td>0.12</td> <td>0.15</td> <td>0.18</td> </tr> <tr> <td>レベル2地震動</td> <td>0.16</td> <td>0.20</td> <td>0.24</td> </tr> </tbody> </table> <p>※1 「5.2.2 補強土(テールアルメ)壁自体の安定性の検討(外的安定検討)」時には補正係数 ($\nu=0.7$) を乗じる。 ※出典：道路土工-擁壁工指針¹⁴⁾</p>		地震種別			I種	II種	III種	レベル1地震動	0.12	0.15	0.18	レベル2地震動	0.16	0.20	0.24	<p>表-4.4 設計水平震度の標準値 k_h (部材の安全性及びテールアルメ自体の安定照査時)^{※1}</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th rowspan="2"></th> <th colspan="3">地震種別</th> </tr> <tr> <th>I種</th> <th>II種</th> <th>III種</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>レベル1地震動</td> <td>0.12</td> <td>0.15</td> <td>0.18</td> </tr> <tr> <td>レベル2地震動</td> <td>0.16</td> <td>0.20</td> <td>0.24</td> </tr> </tbody> </table> <p>※出典：道路土工-擁壁工指針¹⁴⁾ ※1 「5.2.2 補強土(テールアルメ)壁自体の安定性の検討(外的安定検討)」時には補正係数 ($\nu=0.7$) を乗じる。</p>		地震種別			I種	II種	III種	レベル1地震動	0.12	0.15	0.18	レベル2地震動	0.16	0.20	0.24					
	地震種別																																						
	I種	II種	III種																																				
レベル1地震動	0.12	0.15	0.18																																				
レベル2地震動	0.16	0.20	0.24																																				
	地震種別																																						
	I種	II種	III種																																				
レベル1地震動	0.12	0.15	0.18																																				
レベル2地震動	0.16	0.20	0.24																																				
4	102	7	k_{hv} ：修正設計水平震度 ($=\nu \cdot k_h$) θ ：地震時合成角($^\circ$)で $\theta=\tan^{-1}k_{hr}$ とする。	k_{hv} ：修正設計水平震度 ($=\nu \cdot k_h$) ν ：補正係数 θ ：地震時合成角($^\circ$)で $\theta=\tan^{-1}k_{hv}$ とする。																																			
4	105	8	また、 車両が 圧縮された雪の上を車両が	また、圧縮された雪の上を車両が																																			

補強土(テールアルメ)壁工法設計・施工マニュアル 第4回改訂版 正誤表

4	107	4	直接設ける場合には、防護柵基礎の設計において	直接設ける場合の防護柵基礎の設計において
4	111	22	予備設計段階においては、	予備設計段階等で土質試験を行うことが困難な場合は、
4	113	1	偏心及び荷重の傾斜は	偏心は
4	117	表-4.13	注5) B : テールアルメ底面の幅 (スキンの厚さ+最下段ストリップ長)	注5) B : テールアルメ底面の幅 (スキンの厚さ+補強領域底面の幅)
5	133	8	$K_i = K_0 \left(1 - \frac{z_i}{2_0}\right) + K_A \frac{z_i}{2_0} \quad z_i \leq 2_0 = 6.0m \text{ のとき} \quad (5.1.6)$ $K_i = K_A \quad z_i > 2_0 \text{ のとき}$	$K_i = K_0 \left(1 - \frac{z_i}{2_0}\right) + K_A \frac{z_i}{2_0} \quad z_i \leq 2_0 = 6.0m \text{ のとき}$ $K_i = K_A \quad z_i > 2_0 \text{ のとき} \quad \left. \vphantom{K_i = K_0} \right\} (5.1.6)$
5	160	24	B : テールアルメ底面の幅 (スキンの厚さ+最下段のストリップ長) (m)	B : テールアルメ底面の幅 (スキンの厚さ+補強領域底面の幅) (m)

章	頁	行	誤	正
5	161	図-5.20	<p>仮想背面が最上段の補強材の内側に位置している</p> <p>(a) 常時 (b) 地震時</p> <p>図-5.20 仮想擁壁の滑動のイメージ</p>	<p>P.95 の図-4.5 とその記述に合う図に修正</p> <p>(a) 常時 (b) 地震時</p> <p>図-5.20 仮想擁壁の滑動のイメージ</p>
5	162	13	<p>B : テールアルメ底面の幅 (スキンの厚さ+ 最下段のストリップ長) (m)</p>	<p>B : テールアルメ底面の幅 (スキンの厚さ+ 補強領域底面の幅) (m)</p>
5	163	図-5.21	<p>図-5.21 転倒に対して安定となる合力の作用位置の範囲</p>	<p>図-5.21 転倒に対して安定となる合力の作用位置の範囲</p>

補強土(テールアルメ)壁工法設計・施工マニュアル 第4回改訂版 正誤表

5	164	図-5.22	 <p>(a)常時 (b)地震時</p> <p>図-5.22 テールアルメ底面の地盤反力の分布</p>	 <p>(a)常時 (b)地震時</p> <p>図-5.22 テールアルメ底面の地盤反力の分布</p>
5	165	26	<p>B : テールアルメ底面の幅 (スキンの厚さ + 最下段ストリップ長) (m)</p>	<p>B : テールアルメ底面の幅 (スキンの厚さ + 補強領域底面の幅) (m)</p>

補強土(テールアルメ)壁工法設計・施工マニュアル 第4回改訂版 正誤表

章	頁	行	誤	正
5	169	19	<p>$T_{avail.i}$: ストリップの発揮可能な引張強さ (想定すべり円より奥側にあるストリップの許容引張強さ (T_A, T_{AE}) または引抜抵抗力 (T_P, T_{PE}) の小さい方の値) (kN/m)</p> <p>R : すべり円弧の半径 (m)</p>	<p>$T_{avail.i}$: ストリップの発揮可能な引張強さ (想定すべり円より奥側にあるストリップの許容引張強さ (T_A, T_{AE}) または引抜抵抗力 (T_P, T_{PE}) の小さい方の値) (kN/m)</p> <p>θ : ストリップ位置でのすべり面の交点とすべり円中心を結ぶ直線と鉛直線とのなす角度 ($^{\circ}$)</p> <p>R : すべり円弧の半径 (m)</p>
5	169	26	<p>予備設計段階においては,</p>	<p>予備設計段階等で土質試験を行うことが困難な場合は,</p>
5	170	(5.2.35)	$F_{sE} = \frac{\sum\{c \cdot l + (W \cdot \cos\alpha - k_h \cdot W \cdot \sin\alpha)\tan\phi\}}{\sum(R \cdot W \cdot \sin\alpha + k_h \cdot W \cdot \gamma_G)}$	$F_{sE} = \frac{\sum\{c \cdot l + (W \cdot \cos\alpha - k_h \cdot W \cdot \sin\alpha)\tan\phi\}}{\sum(W \cdot \sin\alpha + k_h \cdot W \cdot \frac{\gamma_G}{R})}$
5	182	図-5.36	<p>図-5.36 谷部 (集水地形) への適用例</p>	<p>図-5.36 谷部 (集水地形) への適用例</p>
5	183	21	2-3-7	2-7-3

補強土(テールアルメ)壁工法設計・施工マニュアル 第4回改訂版 正誤表

5	184	図-5.38	<p>(c) 土中集排水管断面図</p>	<p>(c) 土中集排水管断面図</p>
5	188	1	道路拡幅の腹付け盛土 や鉄道における腹付 は線増 等のように	道路拡幅の腹付け盛土等のように
5	198	図-5.52	5%強度	5%程度
5	199	13	施工手順を ともに 考慮し	施工手順を考慮し

補強土(テールアルメ)壁工法設計・施工マニュアル 第4回改訂版 正誤表

章	頁	行	誤	正
技資1	273	7	B : テールアルメ底面の幅 (スキンの厚さ+ 最下段ストリップ長) (m)	B : テールアルメ底面の幅 (スキンの厚さ+ 補強領域底面の幅) (m)
技資1	281	図		
技資1	283	6	粘着力 $c=50(\text{kN/m}^2)$	粘着力 $c=100(\text{kN/m}^2)$
技資1	310	24	$e=B/2-d_E=-0.074 \leq B/3=1.380(\text{m}) \dots \text{OK}$	$e=B/2-d_E=0.107 \leq B/3=1.380(\text{m}) \dots \text{OK}$
技資1	311	9	$q_a = q_u/F_s = 429.579(\text{kN/m}^2)$	$q_a = q_u/F_s = 287.915 (\text{kN/m}^2)$
技資1	311	12	q_u :基礎地盤の極限支持力度 = 1201.273 (kN/m^2)	q_u :基礎地盤の極限支持力度 = 863.745 (kN/m^2)
技資1	311	15	$q_s=256.323 \leq q_a=429.579(\text{kN/m}^2) \dots \text{OK}$	$q_s=256.323 \leq q_a=287.915(\text{kN/m}^2) \dots \text{OK}$
技資1	311	23	$q_{aE} = q_{uE}/F_{sE} = 644.369(\text{kN/m}^2)$	$q_{aE} = q_{uE}/F_{sE} = 292.136 (\text{kN/m}^2)$
技資1	311	26	q_{uE} :基礎地盤の地震時の極限支持力度 = $1288.737 (\text{kN/m}^2)$	q_{uE} :基礎地盤の地震時の極限支持力度 = $584.272 (\text{kN/m}^2)$
技資1	312	2	$q_{sE}=252.085 \leq q_{aE}=644.369(\text{kN/m}^2) \dots \text{OK}$	$q_{sE}=252.085 \leq q_a=292.136(\text{kN/m}^2) \dots \text{OK}$
技資1	313	13	$q_a = q_u/F_s = 375.128(\text{kN/m}^2)$	$q_a = q_u/F_s = 366.837(\text{kN/m}^2)$
技資1	313	16	q_u :基礎地盤の極限支持力度 = $1125.384 (\text{kN/m}^2)$	q_u :基礎地盤の極限支持力度 (kN/m^2) = $1100.511 (\text{kN/m}^2)$
技資1	313	20	$q_s=289.300 \leq q_a=375.128(\text{kN/m}^2) \dots \text{OK}$	$q_s=289.300 \leq q_a=366.837(\text{kN/m}^2) \dots \text{OK}$

補強土(テールアルメ)壁工法設計・施工マニュアル 第4回改訂版 正誤表

技資1	314	7	$q_{aE} = q_{uE}/F_{sE} = 562.692(\text{kN/m}^2)$	$q_{aE} = q_{uE}/F_{sE} = 550.255(\text{kN/m}^2)$
技資1	314	10	q_{uE} :基礎地盤の地震時の極限支持力度 = 1125.384 (kN/m ²)	q_{uE} :基礎地盤の地震時の極限支持力度 = 1100.511 (kN/m ²)
技資1	314	13	$q_{sE} = 263.420 \leq q_{aE} = 562.692(\text{kN/m}^2) \dots \text{OK}$	$q_{sE} = 263.420 \leq q_{aE} = 550.255(\text{kN/m}^2) \dots \text{OK}$
技資3	344	技資図 5-6 (SC種)		
章	頁	行	誤	正
技資5	393	技資図 5-6	f_m^*/f_a^*	f_m^*/f^*
技資6	409	23	T : 経過時間(年)	t : 経過時間(年)
技資6	410	2	$\Delta a = 1.1 \times 25r^{0.80} = 55r^{0.80}(\mu\text{m})$	$\Delta a = 1.1 \times 2 \times 25r^{0.80} = 55r^{0.80}(\mu\text{m})$
技資6	463	注1)	自分量	目分量

以上
2017.9